

私の専門分野である神経内科領域は、生存率の上昇と高齢者人口の増加とともに、急激に増加した疾患 — 認知症をはじめとする神経変性疾患や脳血管障害など — で注目を浴びるようになった分野です。

神経は脳や脊髄という中枢神経から末梢神経にいたるまで、運動神経や感覚神経といった随意神経だけでなく、交感神経や副交感神経といった自律神経まで全身に分布します。加齢によって神経組織も障害が生じます。その障害部位は細胞核でも神経線維でもシナプスでも起こりえますが、最終的にはシステム全体の機能障害に陥り、様々な特徴を有する疾患にいたります。

神経細胞は、一部の細胞を除いて再生したり細胞分裂により増殖したりすることがないため、症状は徐々に進行し、その多くが難病に位置づけられます。近年の脳科学の目覚ましい進歩により、病因の解明や治療法が次々に開発されてきましたが、いまだ根治的治療にはいたらず、進行のスピードを遅らせるにとどまっています。

西洋医学的アプローチだけでなく東洋医学の力も駆使して、患者や患者を支える家族の苦しみを軽減することが、私の目指す医療です。

他方、漢方医学の特徴を表す言葉として「心身一如」があります。臓器や器官をまたいで全身に分布する神経組織を治療のターゲットにすることは、心と体を分離できないものとして治療にあたる、漢方医学の基本的理念にまさに一致するところです。

本日は、神経変性疾患の一つである認知症と、日常診療でしばしば遭遇する慢性疼痛についてお話したいと思います。

最新の知見をご紹介しながら、西洋医学、東洋医学双方の観点にたつて疾患をとらえること、そして実症例を提示することによって、より実践的なイメージをもっていただき、先生方の臨床の現場に少しでもお役立ていただければと思います。